

★ Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo★

# Al Vi Kara

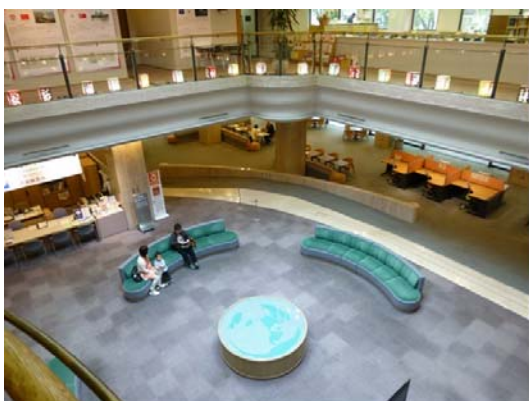
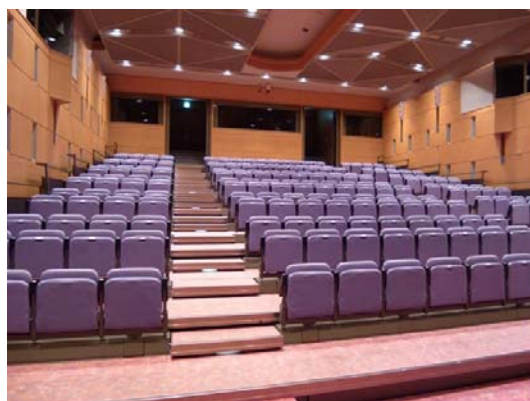
★ Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo★

## N-ro 104, julio 2014

La 63a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo okazos venontajare en Kioto. La kongresejo estos “Domo por Internacia Komunumo de Kioto” (Kyoto International Community House). (来年の第63回関西大会は京都で開催)



Ĝi situas en la kvartalo Higaŝijama, orienta parto de la urbego Kioto. Ĉirkaŭe troviĝas la fama templo Nanzen-ĵi (南禅寺), postsigno de la Biŭako-kanalo, muzeoj, kaj eĉ zoologia ĝardeno. Ankaŭ legu la paĝon 16.



Ĝi enhavas belan halon kaj larĝan komunejon. Fotis s-ro Kawagoe.

## ☆ ENHAVO (目次) ☆

特別寄稿：中野忠一郎が甦ってくる！	大類 善啓	日本語	p. 3
京都観光案内			
Turismaj informoj pri Kioto (3)	Aikawa Setuko	ESP.	p.10
ABZ kiel gastigi (5)	TAHIRA Masako	ESP.	p.12
La naturo estas mia lernejo	MICUKAŬA Sumiko	ESP.	p.14
Vidindaĵoj ĉirkaŭ la kongresejo	KAŬAGOE Kan	ESP.	p.16
Ni vigle agadas en Kioto !		日本語	
2013 年 春の初級講座			p.19
4 月 10 日・17 日例会にドイツからのお客様			p.19
第 61 回関西エスペラント大会への参加			p.20
5 月 29 日例会にハンガリーからのお客様			p.20
日曜学習会			p.20
第 98 回世界エスペラント大会への参加			p.21
7 月 31 日例会に香港とインドネシアからのお客様			p.21
第 45 回林間学校への参加			p.22
9 月 18 日例会にイギリスからのお客様			p.22
京都府国際センターでの国際活動パネル展			p.22
第 100 回日本エスペラント大会への参加			p.22
10 月 16 日例会にイランとインドネシアからのお客様			p.23
ザメンホフ祭			p.23
12 月 4 日例会にカナダからのお客様			p.23
2014 年 年次総会			p.23
第 1 回イラン・エスペラント大会への参加			p.24
4 月 9 日例会にフランスからのお客様			p.24
4 月 16 日例会にオランダからのお客様			p.24
春の入門講座			p.25
第 62 回関西エスペラント大会への参加			p.25
日曜学習会			p.26
Nova Feniksa Halo (新しい平等院鳳凰堂)		ESP.	p.27

# 中野忠一郎が甦ってくる！

—エスペラントは死者と生者を引き合わせる—

おおるい よしひろ  
大類 善啓

40 数年前、少しばかりエスペラントをかじったことがある。しかしその後はエスペラントやザメンホフについて雑文を書くことはあったが、エスペラント語そのものはまったくと言っていいほど放擲していた。ところが昨年の2 月から学習を再開した。きっかけは近年の「領土問題」である。

中国や韓国との間に横たわる「領土問題」は、日本を含め各国それぞれが「固有の領土」という言い方で相手国を非難し、日本ではそれに呼応するかのようにマスコミとネットが人々を煽り、排外主義的な雰囲気を漂わせている。

## ザメンホフの人類人主義

「尖閣諸島」は20 世紀の前半まで、近隣諸国の船乗りにとって「共有の道しるべ」だった。(山田慶兒・京大名誉教授著『海路としての<尖閣諸島> 航海技術史上の洋上風景』) 彼らの意識の中には国境のような壁はなく、「固有の領土」なる発想は持ち合わせていないのである。

「固有の領土」という考えが生まれる前提が、「国家主権」であり、「国民国家」という概念である。そもそもその前提がおかしいのではないかと考えるうちに、ザメンホフの Homaranismo ホモラニスモという思想に思いを巡らすようになったのである。「日本」や「日本国民」などという“国家”や“国民”にアイデンティティを求めると、近隣諸国との争いの種はつきない。そう思った時、ザメンホフの Homaranismo が私の中にリアリティーとして甦ってきた。

エスペラントで<ホマーロ>は人類、<アーノ>は一員を意味し、それに<イスマ> (主義) がついて、<人類人主義>、即ち、「我々は人類の一員である」という思想には、国家や民族を超えた世界市民という考えがある。そういう思想を確固として持てば、「固有の領土」なんていう発想は生まれてはこない。

(次頁へ)

「京都のザメンホフ」と呼ばれた眼科医 中野忠一郎氏(1874~1930)と、中野氏の墓について、大類善啓さん(東京在住)からご寄稿をいただきました。大類さんが京都の東大谷墓地にある墓を訪問された時の写真は7 頁をご覧ください。(編集子)

日本の近代の夜明け頃に生まれた民衆宗教の開祖たち、例えば大本教の出口なおや出口王仁三郎の著作を紐解けば、「この世の大地はすべて神のもの。我々は大地を神から借りているのだ」といったような言葉を見出せるはずである。

そんな思いを《国際主義を超えて HOMRANISMO を！ —K・マルクスからL・ザメンホフの人類主義へ—》と題して、〈方正(ほうまさ)友好交流の会〉の会報『星火方正』16号(2013年5月発行)に書いた。方正とは中国のハルビン市郊外にある地名である。そこには、いわゆる「満蒙開拓民」たちが葬られている日本人公墓が1963年、中国政府よって建立されている。この知られざる公墓の存在を広く知ってもらい、国境を超えた国際的な友愛精神を喚起しようと、2005年に仲間たちと〈方正友好交流の会〉を立ち上げた。

この巻頭の拙文が予想もしないほど反響があった。昔のエスペラント仲間の友人からは、感激したというメールをもらった。また、〈文化大革命〉の時代、日本人で唯一人、北京に残り、中国を見ていた元朝日新聞社北京支局長だった秋岡家栄さんから、拙文の趣旨を2回に分けて自分が主宰する〈日中友好99人委員会〉の会報に書いてくれというメールが来た。〈まさに今、大類さんの言わんとすることが求められています〉という熱いメールには驚くとともに嬉しくなった。

秋岡さんが嘆くように、周恩来時代に輝いていた〈国際主義〉は、今の中国では色褪せてしまい、〈愛国主義〉という名のナショナリズムが勃興しているのだった。

## 再会したエスペラントの友人たち

エスペラントを再開すると、かつての仲間が思い出されてくるのだった。その中の一人、昔エスペラントでお世話になった阿部祈美さんに、それこそ40年ぶりに横浜の自宅で昨年10月お会いした。その1ヵ月後、阿部さんは黄泉の国に旅立った。享年86歳。もしその時会うのを少しでも躊躇していたら、会えなかったろう。そう思うと、会いたい時はすぐさま行動に移すことである、と肝に銘じた。

昨2013年10月中旬、東京で開催されたエスペラント日本大会にも初めて参加した。一期一会というが、ここで田平正子さんにお会いしたのだ。〈エスペラントで旅をする〉分科会の進行役が田平さんだった。「参加者が日本人だけなら、日本語でやっちゃいましょうね」と話す、茶目っ気もある田平さんだったが、海外からのゲストも参加したのでエスペラントで会は進行した。

そのため話された内容の詳細はわからなかったが、田平さんが個性的に生きていらっしやることだけは直感的にわかり、いろいろとお話したかった。が、お互い予定が詰まっていて叶わず、散会后、京都に在住する田平さんとはメールで何度もやりとりした。本当はすぐにも京都に飛んで行きたいところだが、何せこっちは万年貧乏書生のようなものだから、すぐに京都へは行けない。

ところがうまく出来ていると言ったら、叔母が怒るか、良かったねと言うか。叔母の福井以津子が2か月後の12月中旬に亡くなった。菩提寺は京都である。夏ごろから「もう死に時だわ」と呟き、心身も気力も失せていた叔母がそれこそあつと言う間に逝ってしまったのだ。「末期の多幸福感」に包まれ、天寿を全うしたように安らかに息を引き取った。叔母も阿部祈美さんと同じ享年86歳だった。叔母はエスペラントを学ばなかったが、叔母と一緒に中央労働学院で、伊東三郎（『エスペラントの父 ザメンホフ』の著者）の話聞いたこともあった。叔母の後見人である私は納骨のため、どうしても京都に行かなければならないことになった。

## 中野忠一郎が思い出された！

今年2月中旬、その納骨のため京都で田平さんとゆっくりにお話する機会ができた。田平さんのお誘いで、エスペラント語で歌う野田淳子さんのコンサートがある東山いきいき市民活動センターにも出かけた。そこで紹介された光川澄子さんと相川節子さんと共に、その夜と一緒に会食した。皆さん40年来のエスペランティストである。ビールを飲み紹興酒を味わいながら歓談していると、中野忠一郎を思い出した。もしかしてこの方々なら、中野忠一郎の名前ぐらいは知っているのではないか。そう思って、「私の親戚になるのですが、中野忠一郎というエスペランティストが京都にいたんです。ご存知ですか」と問うと、皆さん全員が知っていらっしゃるではないか。

光川さんなどは、「中野忠一郎さんのお墓には一度お参りに行きたいと思っているんです。お墓にはエスペラントで碑銘が刻んであると言うんですよ。どこにあるんでしょう？」とまで言われるのだった。

いやぁ本当に驚いてしまった。中野忠一郎は戦前に亡くなり、もちろん会ってはいない。その名前は、実は大昔に忠一郎の孫にあたる当時高校生であった中野忠澄から「祖父は京都のザメンホフと言われたらしいんです」と聞いていた程度だったのだ。

## フサ夫人さんと親しかった私たち

中野家と私の家がどういう関係なのか、母の夏子にかつて聞いても、その関係図が頭によく入らなかった。今回、この原稿を書くために忠澄や私の長姉・久美子に聞いてみたら、母・夏子を書いた自筆の系図のようなものが出てきたが、思った以上に近い関係にあるようだ。母は、どういうわけか中野家の家族と親しかった。忠一郎の妻であるフサ夫人とは、とりわけ親しいように見え、またフサ夫人の今は亡き息子や娘さんとも親しかった。

父の仕事の関係で、新婚の所帯を大阪で持った両親は1945年の5月だったか、大阪の大空襲を避けるため、親戚から京都の田舎に来るように言われた。その家も中野家と親戚関係になる。

1945年3月10日の東京大空襲では、日本橋浜町にいた母の両親、私から見れば祖母と叔母（以津子の次姉）そして1歳になる男の子が亡くなった。東京での二の舞を避けるためにも母たち両親は、その言葉に甘えて現在の京都府城陽市の寺田に引越した。そこに13年ほど住んだろうか。

その寺田に、忠一郎の妻フサ夫人は年に数回、私から見れば、もっと頻繁に寺田にやってきて母の夏子と歓談していたように思えた。母の手料理を食べながらフサ夫人は「これ、どないして作らったん？」と聞く様子が今でも鮮やかに蘇るのである。

帰りは玄関まで出て見送るのだが、背の高いフサ夫人が飄々と歩く後姿をよく覚えている。母に倣ってか、姉を含めて私たちはフサ夫人を本人の前では「おばさん」と呼んでいたが、いない時は「フーさん、フーさん」と親しく呼び、「今日、フーさんがきはったえ」というように話していた。フサ夫人は母のことを「夏ちゃん、夏ちゃん」と呼んでいた。

## <京都のザメンホフ>

1957年、中学1年の1学期を終えて、父の仕事の関係で私たち一家は東京に移った。その後、私が高校時代から一人で京都に行くたびに、どういうわけかいつも五条の中野家を訪問していた。近視になって初めての眼鏡を調製してもらったのも、忠一郎の長男で眼科医の中野忠夫が診療する中野眼科だった。周知のようにザメンホフは眼科医である。エスペランティストで眼科医であり、容貌もザメンホフに似ていた忠一郎が<京都のザメンホフ>と言われるようになった所以である。

昨年、田平さんたちに会って、時に「東の何々、西の中野」と呼ばれるほどのエスペランティストがこんなにも身近に、親しみをもって思い出されるような存在なのかと思い、とても嬉しくなった。光川澄子さんに「一度はお墓参りをしたい」と言われると、今回は忠澄に会わずに帰京しようと思っていたが、すぐその場から彼に電話を入れ、翌日の日曜日、南座前で忠澄と落ち合い、八坂神社そばの喫茶店で本当に久しぶりに歓談した。聞けば、忠一郎の墓は八坂神社の裏、東大谷廟にあるという。すぐそこではないか、それじゃお墓参りしようと彼と出かけたのだった。東大谷墓地の高台にあるこの墓に、高齢の光川さんが参るには、しんどいだろうなと思いながら石段を上がって行った。そこに中野忠一郎が眠る中野家の墓があった。墓石の側面にはエスペラントで「Trankvile Dormas ĉi-sube Dro Ĉuiĉiro Nakano Batalanto de Esperanto（エスペラントの闘士 医師 中野忠一郎 このもとに静かに 眠る）」と碑銘が刻んである。

この墓地は広大である。参拝する人のために、忠一郎の眠る墓は16区125号であると記しておこう。

Yahoo! 地図より、京都市東山区



東大谷墓地

中野忠一郎氏の墓は 16 区 125 号



Trankvile  
Dormas  
ĉi-sube  
Dro Ĉuiĉiro Nakano  
Batalanto  
de  
Esperanto



中野忠一郎の墓と、筆者  
(撮影：中野忠澄)

## 『中野忠一郎の思い出』

わが家にも『中野忠一郎の思い出』（以下、『思い出』と略す）という冊子が送られて来ていたはずだが、姉も今は持っていないというので、忠澄にエスペラント関係のところだけコピーして送ってもらった。昨年刊行された『日本エスペラント運動人名辞典』にも忠一郎について少しばかり書かれてはいるが、『思い出』には当然とは言え及ばない。

1874年（明治7年）に生まれた忠一郎は、この『思い出』によれば1907年（明治40年）、眼科医を開業してから7年目、「時に友人と四条通りのレストランで夕食を取り、ビリヤードに興ずることもあったらしい」と日記から読み取れるという。まだ33歳、モダン青年の雰囲気を行々としてさせる。

忠一郎の次男である孝夫はこう記している。〈そのころ又、父は自分の発声を蝸管に吹き込みすぐ聴くことの出来るエジソン蓄音機を購入して英会話ばかりでなく独逸語の会話まで勉強を始めていたが、その他にポーランドの眼科医ザメンホフ考案の国際共通語「エスペラント」の通信講義録を取り寄せてコツコツ勉強し始めていた〉。

1911年（明治44年）、「大逆事件」が起こった。明治天皇に爆裂弾を投げつけるという罪状で幸徳秋水らが死刑になった。その一味にエスペランティストがいたらしい。エスペラント講義録の発送名簿には中野忠一郎の名前が載っている、というので新設された府警、危険思想取締専門係の人から注意を受けたらしい。〈それではと父はガリ版刷りのエスペラント講義を一枚残さず、それに秋水の先生に当る民権論者、中江兆民のベストセラー『一年有半』も一緒に、書斎押入の本棚おく深くに収いこんだ〉と記されている。

しかしエスペラントの情熱は衰えることはなかったようだ。孝夫はまたこう書いている。〈久しぶりに五条へ帰宅した。六月末、もう暑い東向きの二階座敷に臥せていた父を見舞うと、ふと目を覚ました父は私に向って『星がな、緑の星がな、あそこに墜ちたからな、拾っておいでや』と真顔で一言言って又すやすやと寝入ってしまった。私が父の言葉を聞いたのはこれが最後で、父はきっと天上にエスペラントのシンボル緑の星が輝いている夢を見つづけていたのだなと思った〉

カルテがエスペラントで書かれ、晩年は本当にエスペラント運動に精力を注いだようである。病床で「わしが死んだらフンダメンタ・クレストマティオ（ザメンホフの模範文集）を胸の上に置いて火葬してくれ」と言い、家のものは実行した。これについては『日本エスペラント運動人名辞典』にも紹介されている。

忠一郎の葬式には、京都のエスペランティスト40数名が棺の前で「エスペーロ」を合唱したという。フサ夫人は忠一郎の残したエス語関係の書籍400冊ばかりを京都府立図書館に寄贈した。



忠一郎は社会的な関心も強かったという。『思い出』の中で、自宅の壁に掛かっていた忠一郎の肖像画でしか接することのなかった忠澄は、《祖父と私》と題してこう記している。<（忠一郎の）その生き方は、明治という時代の制約の中での一つの型であると同時に時代を超えた普遍性をもつ一つの積極的な生き方であったろうと私には思われます>。

ちなみに忠澄は、糖尿病を患った忠一郎を思うかのように、現在、糖尿病専攻の内科医である。

今手元に、田平さんから送られた『軍医殿！腹をやられました インパール作戦ビルマ敗走記』（中野信夫著 《かもがわブックレット》）がある。三男の眼科医・信夫は、軍医としてインパール作戦に従事した悲惨な体験を『靖国街道』（1976年刊）としてまとめた。その著作はわが家にも送られ、私も読んだ記憶がある。現在、安倍政権は公然と憲法9条を葬り、集団的自衛権を容認するという方向を打ち出している。このような状況を危機的に捉えた信夫の長女、中野圭子はこの『靖国街道』をブックレットとして再販したのだった。また、信夫の弟である外科医・進は、かつて革新系候補として京都市長選に挑戦した。

忠一郎の社会的な関心とその正義感は、子供たちや孫たちに反戦平和の志としてしっかりと伝わっているようである。

本当に、遠い遠い存在だった中野忠一郎が、実に親しく私に近づいてきたのである。  
(一部敬称略)

## 中野忠一郎氏について

参考までに、日本エスペラント運動人名事典(2013年発行)の記事を転載します。  
(編集子)

中野忠一郎/なかの ちゅういちろう/1874. 2. 17~1930. 10. 14/京都/修道小(1987 中退), 同志社(中退), 三高医学部(1897)/「京都のザメンホフ」と呼ばれた眼科医。1900 年京都市に開業。エスペラントは、1906 年ガントレットの通信教授で学習。1921 年末 JEI(日本エスペラント学会) 入会。1923 年第 11 回日本大会(岡山)で、医学界におけるエスペラント普及の貢献により表彰。1925 年第 13 回日本大会(京都) 準備委員長。カルテをエスペラントのタイプライターで作成。経済的にもエスペラント運動を支援。晩年の病床で「Fundamenta Krestmatio」を胸の上に置いて火葬してくれ」と。JEMA(エスペラント医学協会) 会員。東大谷墓地の墓は ”Trankvile Dormas ĉi-sube D-ro Ĉuiĉiro Nakano Batalanto de Esperanto” と、八木日出雄による碑銘が刻まれる。

## 京都観光案内 Turismaj informoj pri Kioto (3)

Aikawa Setuko

前号はお休みしてしまいましたが、101号・102号に書いた観光案内の続きです。今回は京都市の中心部にある御所、二条城、京都国際マンガミュージアム、新京極通りなどをとりあげます。

### (3)-a Kiota Palaco 京都御所

Ĝis 1869 en la palaco loĝis la familio de tennoo kaj tie okazis diversaj eventoj kaj ceremonioj. En tiu jaro la familio transloĝiĝis al Tokio, sed la palaco estas konservata kaj zorgata de la ŝtato.



El Vikipedio

La tereno de la palaco estas ĉirkaŭita de duobla muro. La interna muro ĉirkaŭas iaman loĝejon de la tennoa familio. Por viziti la internan parton japanianoj devas sin anonci antaŭ pli ol unu monato, sed alilandanoj rajtas tion fari pli malfrue - eĉ surloke.

Vizitantoj povas rigardi la domojn kaj ĝardenojn, kie efektive vivis la tennoa familio kaj ĝiaj servantoj.

La vizito ne estas akceptita en dimanĉo kaj festotago. En sabato oni aŭ akceptas aŭ ne akceptas. Demandu la koncernan oficejon, kies telefonnumero estas 075-211-1215.

Inter la ekstera muro kaj la interna muro estas vasta ĝardeno nomata Kyoto-Gyoen. La ĝardeno estas malfermita al publiko. La loko estas bona promenejo por urbanoj. Oni ĝuas florojn en printempo kaj diverskolorajn foliojn en aŭtuno. Pejzaĝo kun grandaj ginkoj estas eble ekzotika por ne-azianoj.

En la angla lingvo oni nomas la palacon “Kyoto Imperial Palace”, sed la vorto “imperial” ne plaĉas al mi. Japanio ne estas imperio kaj tennoo ne estas imperiestro.

### (3)-b Kastelo Nijo-jo [nijoo-ĵoo]

二条城

“Nijo” estas nomo de strato. La kastelo troviĝas apud la strato kaj havas tiun nomon.



El Vikipedio

La kastelo estis konstruita en 1603 laŭ ordono de Tokugawa Ieyasu, kiu fariĝis ŝoguno en la sama jaro. Lia ĉefa loĝejo estis en Edo (nuna Tokio), sed li havis kastelojn ankaŭ en aliaj urboj. Kioto estis politike grava loko kaj li bezonis tie unu el siaj kasteloj.

Pro fajrego la ĉefa konstruaĵo estis detruita en 1788. Sed restis alia grava konstruaĵo nomata Ninomaru-goten, kaj tie okazis diversaj gravaj kunsidoj kaj ceremonioj. Ekzemple Tokugawa Yoshinobu, la 15-a ŝoguno de Tokugawa-familio, oficiale deklaris redoni sian reg-potencon al tennoo en ĉi tiu kastelo.

Anstataŭ la perdita ĉef-konstruaĵo oni nun havas novan domon. Ankaŭ ĝi estas arkitekture kaj belarte interesa, ĉar oni transportis ĉiujn partojn el la tennoa palaco. Turistoj povas eniri en la ĉef-konstruaĵon kaj apreci ne nur la domon mem, sed ankaŭ pentraĵojn sur multaj “husuma (ŝovebla muro).

### (3)-c Stratoj Kawaramachi, Teramachi, Shinkyogoku, Nishiki [kaŭaramaĉi, teramaĉi, ŝinkjoogoku, niŝiki]

河原町通、寺町通、新京極通、錦通

Stratoj en Japanio estas longaj kompare kun tiuj de eŭropaj urboj. Longo de unu strato povas esti pli ol kilometro. Sed ĉi tie mi mencias nur parton de ĉiu el la stratoj.

Parto de strato Kawaramachi, precipe inter Sanjo-Kawaramachi kaj Shijo-Kawaramachi, estas konata pro multaj diversaj butikoj.

Strato Shinkyogoku kaj Parto de strato Teramachi estas konataj pro vendejoj por turistoj. Nishiki estas orient-okcidenta strato, tre mallarĝa, sed fama pro vendejoj de bonkvalitaj manĝaĵoj.

La supre menciitaj partoj estas proksimaj unu al alia. Ne nur turistoj, sed ankaŭ urbanoj vizitas la lokon kaj ĉiam la stratoj estas plenaj de homoj.

### (3)-ĉ Internacia Muzeo de Manga 国際マンガミュージアム

“Manga” estas japana vorto, kiu signifas komikso(bildostrio)n.

La muzeo estis establita en 2006, utiligante konstruaĵojn de elementa lernejo, kiu estis fermita pro malmultiĝo de infanoj.

Ĝi konservas 300 mil komiksojn. 50 mil el ili estas publike ekspoziciataj. La muzeo estas ŝatataj de junuloj japanaj kaj alilandaj. (Daŭrigota)

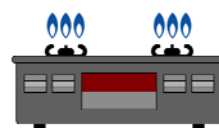
# ABZ kiel gastigi (5)

TAHIRA Masako

## (J) Kiel uzi kuirejon?

Iuj gastoj ŝatas mem kuiru. Bone. Eĉ iuj manĝigas min per sia bongusta kuiraĵo. Dankinde! Mi klarigas, kie estas oleo, salo, pipro, sukero, majonezo, ovoj, legomoj, tranĉiloj, kuleroj, forkoj, manĝbastonetoj kaj aliaj. Kiel ricevi akvon malvarman kaj varman, kiel funkciigi gason tre gravas. Iuj tre timas uzi gason rememorante Aŭŝvican gasĉambron. Mi ekzercas gastojn kiel malfermi la fonton de la gaso, kiel fajrigi la gason, kiel fermi la gason, kiel fermi la fonton. Ili facile lernas.

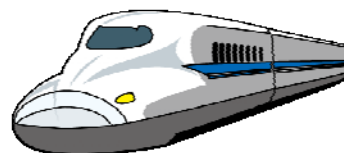
Sed min konsternis unu gasto. Dum mi malestis hejme, ŝi uzis la gason. Kiam mi revenis hejmen post 5 horoj, ŝi ne estis hejme. Sed la gaso fajradis en la kuirejo! Feliĉe sen kuirpoto aŭ kuirpato sur la fajro. Se la poto aŭ pato estus sur la fajro, kio okazus dum la horoj! Mi dankis al Dio. Poste ŝi ne pardonpetis min pretekste, ke la fajroj estis etaj. Mi gapis. Ne temas pri la gaskosto, sed sekureco en la kuirejo! Mi cerbumas, ĉu mi ne lasu gaston sola uzi la gason, se mi ne ĉehejmas. Krome ŝi ĉiam forgesis mallumigi elektran lampon post la uzo de la lampo en la kuirejo, en la necesejo, en la manlavejo. Ŝi estas tre ŝparema en sia monujo, sed malŝparema en mia loĝejo. Tia homo ekzistas en la mondo, mi lernis.



Gasforno

## (Ĵ) Kie bonvenigi gaston?

Mi jam skribis en <(C) Kie akcepti?> en la komenco de tiu ĉi serio [ABZ kiel gastigi]. Sed mi aldonas. Mi skribis, ke la plej sekura kaj facila akcepto de gasto en stacidomo estas rendevui kun la gasto sur la kajo, kien lia trajno atingas, ĉar troviĝas tre multe da elirejoj en la stacidomo JR-Kioto. En la okazo de Ŝinkansen-trajno gasto antaŭinformu min, el kiu numero de la vagono li eliros. Ŝinkansen-trajno longas



Ŝinkansen-trajno

400 metrojn kun 16 vagonoj, ĉu ne? Se mi ne scias, el kiu vagono gasto eliros, mi devas kuri sur la kajo 400 metrojn por serĉi gaston. Ne ĉiam gasto antaŭe rezervas seĝon. Tiam mi kaj gasto devas serĉi unu la alian sur la longa kajo.

La supre menciita problema gasto mesaĝis al mi tre simple: mi venos al Kioto en X-tago. Mi demandis, ĉu matene, tage, vespere, el kiu direkto al Kioto. Ŝi respondis, el Osako al Kioto per vespera trajno, kiu atingos Kioton je 17:40. En tiu vespero mi havas universitatan lecionon de 19:00 ĝis 21:00, ne proksime de la stacidomo. Mi ne havas tempon akompani ŝin miahejmen post bonvenigo en la stacidomo kaj poste veturi sola al la universitato. Mi respondis, ke ŝi restu kun mi en la universitato. Mirakle mia edzo ne havis laboron tiuvespere. Mi kaj li kun verda flago atendis ŝin sur la kajo. Sed ŝi ne aperis. Je 18:40 mi rapidis al la universitato kaj la edzo restis sur la kajo duonhoron, sed tute vane. Dum la leciono mia poŝtelefono sonoris, sed mi ne rajtis telefoni por ne ĝeni profesoron kaj studentojn. Je 21:00 venis telefonmesaĝo, en kiu ŝi postulas de mi iri al la kajo de la stacidomo. Mi reveturis al la stacidomo. Ŝi staris sur la kajo kaj diris, ke ŝi eraris la trajnon inter Osako kaj Kioto je la promesita horo. Malfrue veninte al Kioto ŝi ne rimarkis mian edzon kun verda flago sur la kajo. Kial ŝi ne telefonis al mia poŝtelefono pri la malfruiĝo, kiam mi atendis ŝin? Ŝi respondis, ke ŝia poŝtelefono ne funkciis. Dum mia ĉeesto en la universitato ŝi telefonis el publika telefonejo, sed vane kiel supre menciite. Kial ŝi ne telefonis al mi el publika telefonejo dum mia atendado de unu horo sur la kajo? Ĉu ŝi ne trovis telefonejon erarante la trajnon?

Eble ŝi neniam spertis vane atendi gaston je promesita horo. Tial ŝia koro ne doloras. Ankaŭ en posta tago ŝi promesis veni sola al Esperanto-domo por lunda babilkunsido, sed ŝi ne venis. Ĝis tiam mi jam akompanis ŝin al Esperanto-domo por merkreda kurso kaj ŝi eĉ markis sur la mapo kie estas Esperanto-domo. Kiam mi revenis hejmen, ŝi diris, ke ŝi perdis vojon. Kial ŝi ne telefonis al mia poŝtelefono el publika telefonejo aŭ el miahejma telefono? Ĉu telefoni aŭ ne telefoni pri sia malfruiĝo aŭ rezigno devenas de kulturaj diferencoj laŭlandaj? Mi kredas, ke ne. Sed kulturaj aŭ moralaj diferencoj inter ŝi kaj mi.

(daŭrigota)

# La naturo estas mia lernejo

MICUKAŬA Sumiko

La naturo silente instruas min pri diversaj aferoj.  
Jenaj estas kelkaj ekzemploj el miaj spertoj.

En malvasta ĝardeneto de mia domo mi tiris  
malgrandan sovaĝan herbon.

Kiel ĝi ne elradikigis sian radikon? Nun mi  
pliforte tiris ĝin. Ho! kia longeco de tiu radiko, kiu nur  
rekte suben kreskis simile al tiu de leontodo. Ja ĝi  
mem elektis sian vivlokon devigite de neniu.

Jes, ankaŭ homoj, kiuj elektis sian vojon laŭ sia volo, klopodas por realigi  
sian revon kaj eblas elteni malfacilaĵon.

Du folioj ĝermis de la semo, kiun mi semis en florpoto. Baldaŭ po du novaj  
naivfolioj daŭre aperis el inter la unuaj du folioj. Mi ĉiutage rigardis ĝin.

Kio okazis al la du unuaj folioj? Ili neniom ŝanĝiĝis, tamen mi sentis, ke  
certe ĝi iomete pli malfortiĝis ol la antaŭtago. De la tago ili iom post iom perdis  
siajn kuraĝojn. Samtempe la postuloj eklasis siajn naivecojn.

La du unuaj folioj lernigis min, ke ni plenaĝuloj devas kapti bonŝancon por  
liberigi sian infanon laŭ la kreskado.

Oni devas frue fortranĉi arbobranĉojn en ĝardeno, kiuj rekte eketendiĝis  
interne (内枝), supre (直上枝) kaj sube (直下枝). Se oni ne faras la laboron, la arbo  
perdos sian eksbelan figuron. Ankaŭ ni homoj similas al la "Infana inklinio restas  
ĝis la fino."

Ŝajnas al mi, ke tiam ankoraŭ preskaŭ nenie videblis la floro de pavokokta  
speco 月下美人, kiun la pliaĝaj geedzoj de mia konato plantis.

Iu somervespere la edzino telefonis al mi. "Ĉi-nokte la floroj malfermos sin  
unufoje!" "Tion ni kune observu." "Por tio vi venu al mia domo kun viaj  
infanoj."



Tiu planto en granda florpoto atendis nin sur japana verando. Ni simple intersalutinte tuj ekrigardadis la grandajn plurajn burĝonojn de floro.

Ha ha?! Ili ĉiuj subite ekvibrigis sin kaj ekfloris, samtempe ekeligis bonan odoron dum pli ol horon kvazaŭ ĝi havus konscion. Niaj dek okuloj ĉiuj estis fiksitaj al la tre stranga fenomeno, kaj la troa surpriziĝo ne permesis nin dormeti.

Laŭ mia memoro je la 0a ili ĉiuj ekŝrumpis.

Nu, iam produktita legomo en subtera fabriko sensuna televide estis montrita.

He? Ĉu ankaŭ ĝi estas natura legomo? Ĉu radioj de multe da lampoj en la fabriko havus saman energion de la suna? Se jes, ĉu la suno ne kuntirus siajn brovojn?

Dank' al mirindega efiko monaton post ŝanĝo de manĝaĵoj kaj kuirmaniero laŭ leĝo de la naturo mi tre bonfartiĝis tiel, kiel mi iluziiĝis, ke ĉiuj sangoj en mia korpo interŝanĝus kun la novaj. Serenecon de la unua mateno mi ankoraŭ nun klare memoras.

Tra la sperto mia korpo lernis severecon de rilato inter manĝo kaj sano.

Do, kien iris tiuj birdoj, kies kelkaj specoj ĉiujare alflugis al mia ĝardeneto? De antaŭ kelkaj jaroj la nombro ĉiujare plimalmultiĝis. Finfine en ĉi-jaro preskaŭ neniu venas al mi. Kion antaŭsciigas nin ĉi tiu fenomeno?

Mi ne scias, ĉu manĝaĵoj kiel supre citita legomo havas plenan energion. Scienca progreso pli kaj pli inventadas diversajn oportunaĵojn, kiuj nian sentecon malproksimigas de la naturo.

Kompreneble ekologia demando estas tro komplekse grandega kaj malfacilega. Sed troviĝas kamparanoj, kiuj spite al nuntempa fluo klopodas produkti naturaĵojn.

Ni pliamikiĝu kun la naturo ne nur por subteni la kamparanojn, sed ankaŭ por riĉigi nian sentecon kaj kutime aŭskultu la voĉon de la korpo. Rezulte malmultigos tro grandegan elspezon de publika sanasekuro, ĉu ne?

Ĉiuokaze mi atendas la birdojn, kiuj en pura aero pepante realflugos al mi. La naturo senlandlima estas vera paradizo. Ĉiuj birdoj en mia imago tie pepus "Paco!" "Paco!".  
(Fino)

# Vidindaĵoj ĉirkaŭ la kongresejo

KAŬAGOE Kan

La ĉirkaŭaĵo de Kioto Domo por Internacia Komunumo, kie la 63-a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo okazos, estas historia, kaj grava kvartalo pro la modernigita Kioto post la epoko de Meĵi.

Post la batalo de Toba-Husimi (1868), Nova registaro estis establita en Kioto. Sed en la sekvanta jaro, Meĵi-Imperiestro transloĝiĝis al Tokio kun la nova registaro malsupoze. Tio estis grandega afero por la urbanoj de Kioto, ĉar tio signifis la dekadencan de Kioto.

Tiu ĉi krizo donis okazon komenci modernigitan entreprenon. Ĝi konsistas el tri aferoj, unue kanalo, due akvokonduko, trie la plilarĝigo de vojo kaj la instalo de elektra vagono. Pro tio Kioto enkondukis fremdlandan kapitalon kaj modernan teknikon. Kaj konstruaĵoj estis praktikitaj kun terura energio.

Apud la Domo, oni povas vidi la postsignon de granda konstruado por kanalo de Biŭako al Kioto kaj funikularo nomata “Inkurain” kiu portis kanalan ŝipon kaj solvis la diferencon inter ambaŭ riveraj niveloj.

Pro la sukceso de la Kanalo, multaj funkcioj estis utiligitaj kiel transportilo de aĵoj, akvoenergia centralo, rivereto por agrikulturo.

Kaj unua Elektra tramo estis malfermita en Japanio. Tio estas granda fiero de Kiotaj urbanoj, eĉ ankoraŭ nun.



El la retejo: [www.kcif.or.jp](http://www.kcif.or.jp) (京都市国際交流協会)





Du larĝaj reloj

Restas postsigno de reloj de la funikularo “Inkurain”.

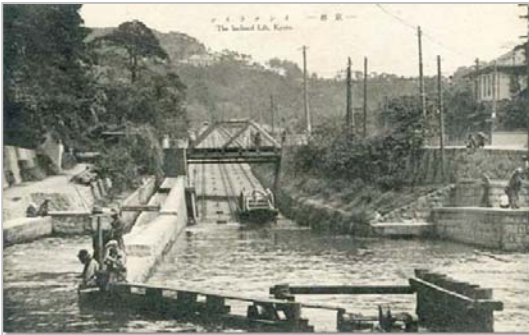


Malnova foto pri la reloj de la funikularo “Inkurain”.

El la retpaĝo

<http://blog.livedoor.jp/preiades2/>

Malnova kaj nova fotoj ĉe la sama loko



Malnova foto de la limo inter la funikularo kaj la kanalo

El la retpaĝo

<http://www.kyoto-be.ne.jp/toba-hs/subject/project/tobanavi2013.pdf>



Nova foto de la sama loko. Maldekstre de la foto troviĝas la Memora Domo pri la Biŭako-kanalo (琵琶湖疎水記念館)

Dekstre →

Enirejo de la Memora Domo pri la Biŭako-kanalo (琵琶湖疎水記念館)

El la retpaĝo

<http://sontyou.sub.jp/kyoto/biwakososuikinenkan.htm>





Keage-centralo (蹴上発電所), unuafoja akvoenergia centralo en Japanio  
Foto el Vikipedio.



Statuo de profesoro TANABE Sakuroo (田邊朔郎) Li estis elektita kiel ĝenerala respondeculo por konstruado de la Biŭako-kanalo, kiam li estis 23-jaraĝa studento.

Rilate tion, unuafoje en Japanio, 64 elementaj lernejoj estis fonditaj de Kiotaj urbanoj en la 2a jaro de Meiji-epoko en Kioto. Sed Japana leĝo pri edukado estis kreita en la 4a jaro de Meiji-epoko. Tial la lernejoj en Kioto estis 2 jarojn pli frue ol la leĝo.

Alia grava evento estis la 4-a Nacia Industria Ekspozicio (内国勸業博覧会), okazinta en la zono de OKAZAKI en 1895. En tiu tempo, en la zono de OKAZAKI troviĝis nur vasta kampo. Sed tamen, dank'al la menciita evento la zono estis malfermita, diversaj domoj estis konstruitaj, kiel industria, agrikultura, maŝina, akvaria, arta, zoologia ktp.

Malfermo de ĉi tiu evento venigis gravan kontribuon kaj disvastiĝon al la ekonomio kaj kulturo de KIOTO.

Samtempe, la fama sanktejo HEIAN-ĴINGUU estis rekonstruita unu-parte de DAIDAIRI. Ĉi tiu sanktejo donas amuleton (omamori) de kvar dioj, kiu protektas popolon kontraŭ katastrofoj.

Nuntempe, por multaj adorvizitoj vizitas ĝin ĉirkaŭ 500,000 personoj jare inkludante alilandajn vizitantojn.

En ĉi tiu okazo, ĉu vi lernu la historion de KIOTO?

(Fino)



Pordego "Outen-mon" de Heian-Ĵinguu  
(平安神宮 應天門)

# ★ Ni vigele agadas en Kioto ! ★

このコーナーは、京都エスペラント会の月刊の活動情報紙「事務局通信」(川越 幹さん編集) やブログ ([http://d.hatena.ne.jp/esperanto\\_kioto/](http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/)) の記事を元に、主な活動を紹介するものです。

## ★ 2013 年春の初級講座

2010～2012 年に引き続き、春に初級講座を開催しました。

- (1) 日時： 2013 年 4 月 6 日～5 月 18 日  
(5 月 4 日を除く)  
毎週土曜日午前 10～12 時 (全 6 回)
- (2) 会場： エスペラント会館
- (3) 講師： 森川 和徳
- (4) 受講料： 3000 円 (受講料 6 回分+教材費)
- (5) テキスト： ドリル式エスペラント入門  
(2012 年までは *La Unua Kursolibro*)
- (6) 広報： マスコミ、ウェブページ、案内はがき
- (7) 講習生： 3 人 (若い男性 2 人、若い女性 1 人)



ドリル式エスペラント入門

	月日	参加者 (敬称略)			内容
		講習生	講師・助手	ゲスト	
1	4/6	2人 SK	3人 森川、川越、野田	—	Esperanto 紹介 ドリル式 A1-A9
2	4/13	2人 SK	4人 森川、川越、光川、田平	S-ino Gisela Passarella	ドリル式 A10-A19 歌 自己紹介
3	4/20	3人 SKT	2人 森川、川越	—	A20-A30
4	4/27	3人 SKT	4人 森川、川越、光川、野田	—	A31-A43
5	5/11	2人 SK	3人 森川、川越、光川	—	B01-B13
6	5/18	2人 ST	3人 森川、川越、野田	—	B14-B40 (途中を飛ばし)

## ★ 2013 年 4 月 10 日・17 日(水) 例会にドイツからのお客様

Gisela Passarella さん(フランス在住)が昼例会と夜例会の両方に出席されました。

★ 第 61 回関西エスペラント大会への参加

La 61a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo

- (1) 日時：2013 年 5 月 25 日(土)～26 日(日)
- (2) 会場：和歌山市民会館（和歌山市）
- (3) 参加者 200 人(実参加者 121 人、不在参加 66 人、その他 13 人)
- (4) 京都エスペラント会からの参加者（50 音順、敬称略、不在参加を含む）12 人  
相川節子、川越 幹、笹沼一弘、水渡篤子、田平正子、浪川光代  
光川澄子、宮本聖子、森川和徳、山内利郎、吉川獎一、山本鳩江
- (4) 京都エスペラント会会員の活躍
  - ・森川和徳さんがミニ大学で講演。

Kial IC-karto funkcias sen baterio?

（電池がないのに、ICカードはなぜ動作するのか？）

- ・笹沼一弘さんがミニ大学で講演

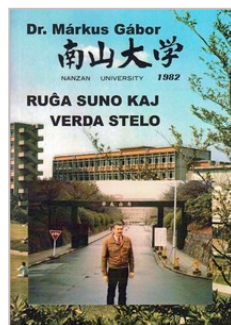
Ĉu ni povas elekti nian estontecon? - balotsistemo kaj politiko -

（私達は未来を選ぶか？－選挙制度と政治－）

- ・相川節子さんがKLEGの副委員長として紹介されました。

★ 2013 年 5 月 29 日(水)例会にハンガリーからのお客様

Markus Gabor さんが昼例会と夜例会の両方に出席されました。右図は、Gabor さんの本の表紙です。



★ 2013 年の日曜学習会

講習生のフォロー、例会に参加できない会員のために開催しました。

- (1) 日時： 日曜日、午後 1 時 30 分～4 時 30 分
- (2) 会場： エスペラント会館
- (3) まとめ役： 森川 和徳
- (4) 受講料： 無料（会員以外は 1 回 300 円）
- (5) テキスト： La Movado 最新号

月日	参加者（敬称略）	内容
6/9	3 人 光川、山内、森川	La Movado 5 月号・6 月号 Legado: saĵaka kaj esperantistoj Informoj: 1) Indonezia Esperanto-Kongreso 2) La 100a Japana Esperanto-Kongreso Precipe, Publika Koncerto en 2013-06-13 3) Literumilo Esperanta Gramatiko: 語尾なし単語の使い方(5)(6) Skribado: Ekzercoj por la aŭgusta numero Legado: Esperantista vivo estas mia dua vivo.

月日	参加者（敬称略）	内容
7/14	6人 講習生S 川越、光川、田平 山内、森川	La Movado 7月号 Legado 1) p.4 Kajero Libervola: Udon 2) Ponto inter popoloj kaj kulturoj el R.O. 2012 nov. Aŭsklutado per videoj el YouTube 1) Esperanto Documentary: Leo Sakaguchi 2) Prononcekzerco kun Mirejo Gramatiko: 初心者のための語尾なし単語の使い方(7) Skribado 1) 楽しい作文教室 2) Ekzercoj por la septembra numero Informoj: 1) エスペラントの町訪問記 Herzberg am Harz 2) 6/30 付中日新聞 アンドレア・ポンピリオさん
8/11	4人 川越、光川 野田、森川	La Revuo Orienta 7-8月号 Krucvorto (クロスワード) La Movado 8月号 Skribado : p.3 楽しい作文教室 Legado : 1) Kajero Libervola: Ĉu Vi Volas Kuri? 2) Rondo Hajkista (エスペラント俳句の紹介) Informoj: 1) ヨーロッパ旅行記 2) CNN ニュース: エスペラントの日 (7/26) 3) レイキャビック世界大会のスナップ写真 4) 来福の家: 温又柔さんと小林エリカさんの対談
10/6	6人 川越、光川、水渡 山内、森川 展示会参加者の方	La Movado 10月号 レイキャビック世界大会の報告 (日本語) 武藤さんの世界大会の感想 (エスペラント) 木谷さんの世界大会の感想 (日本語) 語尾なし単語の使い方、クロスワードパズル 12月号の作文、市川晋平さんのポーランド体験 簡明エスペラント辞典の第1版と第2版の違い

### ★ 2013年7月：第98回世界エスペラント大会への参加

第98回世界大会 (La 98a Universala Kongreso de Esperanto) は2013年7月20日(土)～27日(土)、レイキャビック (アイスランド) で開催され、1034人が参加。日本から100人。京都からは、田平正子さん、田平稔さん、奥脇俊臣さん (亀岡) が参加されました。

### ★ 2013年7月31日(水)例会に 香港とインドネシアからのお客様

Bill MAKさんとDaniele Kristianoさん (学生) が昼例会に出席されました。

写真の前列中央がDanieleさん、後列左端がBillさん。



## ★ 2013年9月：第45回林間学校への参加

第45回林間学校(Friska Lernejo)は9月14日(土)～16日(月・祝日)に善き牧者愛徳の聖母修道会修道院(大阪府豊中市)で開催され、36人が参加されました。

京都エスペラント会からは4人の方々が参加されました。

光川澄子さん、田平正子さん、山本鳩江さん、相川節子さん

## ★ 2013年9月18日(水)例会に イギリスからのお客様

Rowland Goodbodyさん(20歳、言語学専攻学生、写真の右端)が昼例会に出席されました。



## ★ 2013年9月：京都府国際センターでの国際活動パネル展

### Panela Ekspozicio pri Esperanto en Kioto-gubernia Internacia Centro

京都府国際センター主催「国際活動パネル展」では、いろいろな国際活動をしている団体が、順番に自分たちの活動を紹介しています。

京都エスペラント会は、9月26日(木)から10月2日(水)まで展示をおこないました。時間は午前10時から午後6時まで。

京都駅ビルの2階に案内所ができたため、来場者が少なくなっています。小人数ながら、エスペラントに熱心な方の来場もありました。



## ★ 2013年10月：第100回日本エスペラント大会への参加

第100回日本大会は10月12日(土)～15日(火)、タワーホール船堀(東京都江戸川区)参加者は、不在参加者や欠席者を含めて719人。そのうち、外国からの参加者は22カ国から48人でした。

京都エスペラント会からの参加者(50音順、敬称略、不在参加を含む)13人  
相川節子、大久保京、小橋良太郎、笹沼一弘、田平正子と田平稔、  
野田淳子、光川澄子、宮本聖子、森川和徳、八木幹子、山内利朗  
山本鳩江

## ★ 2013年10月16日(水)例会にイランとインドネシアからのお客様

日本大会に招待された Hamzeh Shafiee さん(イラン代表)と Iyan Septiyana さん(インドネシア代表)が夜例会に出席されました。日本とはまったく違う国の興味深いお話しがありました。続く2日間、お二人は関西のエスペ란ティストと観光や食事を楽しみ交流されました。

写真の左から2人目が Iyan さん、右から2人目が Hamzeh さん。



## ★ 2013年11月30日：ザメンホフ祭

ザメンホフ祭は、エスペラントの創始者ザメンホフの誕生日にちなんで毎年行われる行事です。京都・宇治城陽・近江の各エスペラント会は毎年持ち回りで開催しています。2013年は宇治城陽エスペラント会の主催。

2013年のザメンホフ祭は、11月30日(土)13:30~16:30、南宇治コミュニティーセンターで開催されました。

参加者は24人。京都エスペラント会からの参加者は11人。(敬称略)

藤本達生・ますみ夫妻、光川澄子、田平正子、川越幹、野田淳子、山内利朗  
森川和徳、準会員：相川節子、山本鳩江、吉川奨一

野田淳子さんの歌と、橋本義郎さん・今日子さん親子のリコーダー演奏。宇治検定クイズの資料等、楽しい雰囲気皆さん大いに楽しみました。

## ★ 2013年12月4日(水)例会に カナダからのお客様

Joel AMIS さん(アメリカ人)と Jenja AMIS さん(ウクライナ人)夫妻が昼例会と夜例会の両方に出席されました。お二人は2012年8月22日にも例会に出席されました。

AMIS さん夫妻は、写真の中央に立っておられます。



## ★ 京都エスペラント会 2014年次総会

- ・日時：2014年2月11日(火/祝日) 午前11時~午後4時
- ・会場：エスペラント会館
- ・参加者：会員12人(委任19人、無回答者9人) = 正会員35人 + 準会員5人  
[正会員] 川越 幹、坂口泉、笹沼一弘、田平正子、藤本達生、成田和子  
野田淳子、Bill M.MAK、光川澄子、森川和徳、  
[準会員] 相川節子、山本鳩江

・内容

- ① ビデオ上映 劇場中継「イーハトーボの劇列車」  
エスペ란トの歌の紹介  
「サカサマのパテマ」、ABC、Himno al Neĝmonto、La Granda Kantado
- ② 2013年の活動報告、2013年の会計報告（川越 幹）
- ③ 2014年活動計画
  - (1) 2014年春のエスペ란ト入門講座、日曜学習会（森川和徳）
  - (2) 2014年秋の展示会：9-10月、京都府国際センターにて開催予定
  - (3) 2014年ザメンホフ祭：京都エスペ란ト会担当
  - (4) 本誌 *Al Vi Kara* 年2回発行
  - (5) 役員体制及び改選（\*改選）  
会長 : 笹沼一弘  
事務局 : 川越 幹  
会計 : \*森川和徳  
広報 : 光川澄子、川越 幹  
KLEG委員 : 笹沼一弘、川越幹、森川和徳、\*成田和子  
会誌編集 : (編集長)森川和徳、(委員)笹沼一弘、田平正子  
ブログ担当 : \*山内利朗
  - (6) 2015年の関西大会を京都で開催することを承認。

★ 2014年3月：第1回イラン・エスペ란ト大会への参加

第1回イラン大会が2014年3月24日～26日開催され、京都から田平正子さん、白川友磨さんが参加されました。（La Movado 6月号をご覧ください。）

★ 2014年4月9日(水)例会にフランスからのお客様

Martine DemouyさんとMax Demouyさん夫妻が夜例会に出席されました。Perigueuxの町やそのエスペ란ト会、第100回世界大会の開催地Lilleについてスライドを使って紹介されました。夫妻は写真の右端の2人。



★ 2014年4月16日(水)例会にオランダからのお客様

Margreet Deschierさんが昼例会と夜例会の両方にも出席され、いろいろな話題で意見を交換されました。Margreetさんは写真の右から3人目で、座っておられる方です。





## ★ 2014 年春の入門講座

2010～2013 年の講座は土曜日の午前中に開催しましたが、2014 年は日曜日午前中に変更しました。

- (1) 日時： 2014 年 4 月 6 日～5 月 25 日  
(5 月 4 日を除く)  
毎週日曜日午前 10～12 時 (全 7 回)
- (2) 会場： エスペラント会館
- (3) 講師： 森川 和徳
- (4) 受講料： 3000 円 (受講料 7 回分+教材費)
- (5) テキスト： ドリル式エスペラント入門
- (6) 広報： マスコミ、ウェブページ、案内はがき
- (7) 講習生： 1 人 (男性 1 人) 全 7 回出席



ドリル式エスペラント入門

	月日	参加者 (敬称略)			進捗
		講習生	講師・助手	ゲスト	
1	4/6	1 人	3 人 森川、川越、光川	—	A1-A15
2	4/13	1 人	3 人 森川、川越、光川	S-ino Margreet Deschier (オランダ)	A16-A25
3	4/20	1 人	3 人 森川、川越、澤井	—	A26-A39
4	4/27	1 人	2 人 森川、澤井	—	A40-B06
5	5/11	1 人	3 人 森川、川越、澤井	—	B07-b17
6	5/18	1 人	1 人 川越	—	B18-B24
7	5/25	1 人	1 人 森川	—	B25-B40

## ★ 第 62 回関西エスペラント大会への参加

La 62a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo

- (1) 日時： 2014 年 5 月 31 日 (土)～6 月 1 日 (日)
- (2) 会場： イーグレひめじ (兵庫県姫路市)
- (3) 京都からの参加者 (50 音順、敬称略、不在参加を含む) 18 人  
相川節子、川越 幹、後藤美和、小橋良太郎、坂口 泉、笹沼一弘  
水渡篤子、田平正子、富田成美、浪川光代、成田和子、野田淳子  
光川澄子、宮本聖子、村上正彦、森川和徳、山内利郎、山本鳩江
- (4) 京都エスペラント会会員の活躍
  - ・入門講座 森川和徳さんが講師を務めました。  
受講者は13人 (新規は5人、大会参加者は8人)。

- ・開会式  
 後藤美和さんが司会をしました。  
 森川和徳さんがJEI理事長の挨拶を代読しました。  
 川越幹さんが京都エスペラント会を代表して挨拶しました。
  - ・Amika Vespero 田平正子さんがオークションを行いました。
  - ・2日目午前  
 相川節子さんが「語尾なし単語入門」で講義をしました。  
 森川和徳さんのミニ大学。“Redaktu Wikipedion” (ウィキペディア)
  - ・2日目午後  
 野田淳子さんのミニコンサートが行われました。
- 閉会式で笹沼一弘さんが稲田正昭さん(はりま)から大会旗を受け取られ、来年の関西大会を京都に招待されました。
- ※写真は、笹沼さん(左の背の高い方)が大会旗を受け取ったところ。



## ★ 2014 年の日曜学習会

2013 年に引き続き、水曜日の例会以外に学習会を行いました。

- (1)日時： 日曜日、午後 1 時 30 分より
- (2)会場： エスペラント会館
- (3)まとめ役：森川 和徳
- (4)受講料： 1 回 300 円 (京都エスペラント会会員は無料)
- (5)テキスト： La Movado 最新号

日時	参加者 (敬称略)	内容
4/13 13:30~16:30	5 人 S-ino Margreet (オランダ) 光川、川越 野田、森川	La Movado 4 月号 p.14 Vortkruca enigmo 時事ニュース n-ro 114 北朝鮮の拉致 n-ro 112 大震災と AKB48 n-ro 109 ソチオリンピックで活躍した選手 野田さんの歌 (金子みすゞの詩)
5/11 12:30~16:00	2 人 森川、澤井	La Revuo Orienta 3 月号 クロスワードパズル La Movado 5 月号 p.3 作文 p.8 Enamiĝis al Amolingvo 時事ニュース n-ro 118 オバマ大統領訪日 n-ro 117 エネルギー基本計画 n-ro 116 JR 釜石線
7/13 13:30~15:00	2 人 森川、川越	La Movado 7 月号 Kajero Libervola

# Nova Feniksa Halo

En la 1a de aprilo 2014 rekomenciĝis publika malfemo de la fama halo “Hoo-do” (鳳凰堂, Hoo-oo-doo, Feniksa halo) en la templo “Byodo-in” (平等院, Bjo-doo-in, Egaleca templo). La halo havas profundan ruĝan koloron same kiel antaŭ mil jaroj, kaj sur ĝia tegmento brilas oraj feniksaj statuoj. Fotis s-ro Kawagoe.



← Maldekstre

Sur la monero de 10 enoj troviĝas figuro pri la Feniksa Halo.

Dekstre →

Sur la monbileto de 10 000 enoj troviĝas bildo pri la Feniksaj statuoj.



## エスペラント会館での定例の会合

名称	日時		内容
聖書を読む会	月1回 第1月曜	午後1～4時	・相川節子さんが主催 ・会費は1回300円
エスペラントおしゃべり会	毎週月曜日	午後7～9時	・田平正子さんが主催 ・費用は1回300円
京都エスペラント会 昼の例会	毎週水曜日	午後2～4時	・女性を中心
京都エスペラント会 夜の例会	毎週水曜日	午後7～9時	・事務局会議
京都エスペラント会 日曜学習会	月1回 日曜日 8/10, 10/19 11/16	午後 1時30分 ～3時	・La Movado 最新号を読む

## EL LA REDAKTORO

Ĉi-numere mi ĝojas ricevi la kontribuon de s-ro Oorui, kiu loĝas en Tokio. Antaŭ ricevi ĝin, mi tute ne konis doktoron NAKANO Ĉuuiĉiroo, kvankam li estis eminenta aktivulo nomata “Zamenhof en Kioto”. Mi kore fieras agadi en Kioto kun la forpasinta samideano.

K. Morikawa

Al Vi Kara N-ro 104, eldonita en julio, 2014

京都エスペラント会 Kioto-Esperanto-Societo

### ◎事務局

〒600-8455 京都市下京区西洞院五条上る八幡町 537-6 エスペラント会館

電話・FAX : 075-958-2475 (川越 幹)

ブログ : [http://d.hatena.ne.jp/esperanto\\_kioto/](http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/)

電子メール : [esperanto\\_kioto@yahoo.co.jp](mailto:esperanto_kioto@yahoo.co.jp)

会費 : 正会員 年7,200円

準会員 年3,600円 (準会員の条件は La Movado 購読)

Al Vi Kara 購読費 年1,000円

ゆうちょ銀行(郵便)振替口座 : 01000-4-9895 口座名 : 京都エスペラント会

### ◎Al Vi Kara 編集局

連絡先 : 〒618-0071 京都府乙訓郡大山崎町大山崎尻江 13-8 森川和徳

電子メール : [kz\\_morikawa@yahoo.co.jp](mailto:kz_morikawa@yahoo.co.jp)

ファックス : 075-955-1627

PDF ファイルの保管アドレス <http://goo.gl/FgFEb>

※写真をきれいなカラーで閲覧できます。